

動物に潜む人間性

はじめに 3

- 人類の意識的知性はどれほどのものか 3
- 幸福に対する抵抗という人類の心理的特性 5
- 心理的意識の出自の謎 8
- 生物および進化の設計者 12
- 本書の位置づけ 14
- 謝 辞 15

第1章 動物の特異的能力 27

- 西洋世界における動物の位置づけ 27
- 動物のもつ能力の位置づけ 36
- 実験の中で観察される動物の能力 41
 - 賢い動物たち 41
 - 飼育動物が実験の中で示す超常的現象 1. “驚異のレディー” 44
 - 飼育動物が実験の中で示す超常的現象 2. 一連の命令に従うイヌ 51
 - 飼育動物が実験の中で示す超常的現象 3. 屋外での実験的研究 60
- ライン学派による実験室的研究 64
 - オシスによるネコの実験的研究 64
 - ウッドらによるイヌの実験的研究 65
 - その後の実験的研究 67
 - タイコスコープによる実験的研究 1. ショーヴァンの研究 71
 - タイコスコープによる実験的研究 2. ペオックによる第1の研究 73
 - タイコスコープによる実験的研究 3. ペオックによる第2の研究 75
- 自然環境の中で観察される動物の目覚ましい能力 78
 - 渡り、帰巢、遠方への移動 78

第2章 人間と動物の間 1. 人間の言葉を習得した動物たち 85

彼我の差——再考 85

類人猿は人間の言葉をどこまで理解し、使用できるか 92

- グアの事例 98
- ヴィキイの事例 100
 - ヴィキイによる音声言語の発声 102
 - ヴィキイが見せた高度の行動 104
- わが国で行なわれた養育実験 105

音声言語以外の手段を用いた実験的研究	106
手話を学んだ類人猿 1. チンパンジーのウォッシュオー	109
ウォッシュオーが見せた高度な行動	119
手話を学んだ類人猿 2. ゴリラのココ	121
第三者に対する説得力という問題	123
言葉を通じてかいま見えるココの心的側面	126
類人猿は、教えられた手話を自発的に使うか	131
テラスの批判	133
ボノボによる言語の習得	136
サヴェージ＝ランボーとボノボ	136
サヴェージ＝ランボーのグループによる研究	138
作るための努力を重ねる	144
カンジが自然に身につけた言葉の位置づけ	144
その後の奇妙な展開	147
第3章 人間と動物の間	2. 人間と動物の交流
人間と音声言語で対話するオウム	151
ヨウムのアレックス	152
アレックスの個性	158
アレックスの言葉に対する肯定的評価	160
アレックスの位置づけ	162
飼育動物との交流	164
家畜化という現象	164
“利他的”行動をとる動物たち	167
飼い主の健康に寄与する動物たち	170
服役者によるイヌの調教	176
発作犬に観察される自発性	179
発作犬による発作の軽快	182
発作前症候群と発作対応犬	183
発作警告犬による患者の生活の質の向上	190
発作対応犬の行動に関する客観的研究	192
不特定多数の人間の異常を感知する動物たち	195
ペットが示す能力の由来	198
動物の“利他的”行動という問題	199

第4章 個体同士のつながり 実験的検証と理論的検討 203

アオガラによる牛乳瓶の蓋開け行動	294
実験的検証 1. ガレフらによるもの	208
実験的検証 2. コトバウアー＝ヘルマンによるもの	216
実験的検証 3. アプリンらによるもの	218
蓋開け行動伝播の原因	223
シエルドレイクの考えかた	224
形態形成場の理論	224
周辺の現象が形態共鳴仮説でどこまで説明できるか	228
種内の規制という問題	231
シエルドレイクの理論の検討	235
シエルドレイクの貢献	237
シエルドレイクの立場	239
形態共鳴と超常現象	242
シエルドレイクの考えた心	244
シエルドレイクと生まれ変わり	246
伸縮自在のつながり——シエルドレイクの新しい考えかた	248

第5章 動物の意識とその主体性 1. 生物学的考察 255

心の理論という考えかた	256
心の理論仮説の歴史	256
“誤った思い込み”とその実験	258
他者の示唆と自らの信念の対立	258
トマセロの研究グループによる次の対応	273
トマセロの研究グループの位置づけ	278
類人猿が置かれた立場を理解することの重要性	281
心の理論と鳥類	283
類人猿の遠慮深謀	288
意識的な計画的行動	289
人間と類人猿の“知能合戦”	295
人間を欺く策をめぐらす	298
人間の反応を見るための芝居を打つ	301
自分の勘違いに気づく	302
ごっこ遊び	306

第6章 動物の意識とその主体性 2. 心理学的考察 315

生物界の秩序と生物観	315
------------	-----

動物の意識の心理学	320
意識の存在の傍証となるもの	320
今西とベルクソンの共通点	324
意識の生物学, 生理学, 心理学	325
自己像と意識	332
鏡を使った霊長類の自己認識実験	332
鏡と鳥類	338
自己認識の過程と段階	346
付録	349

第7章 人類の動物性と人間性 351

今西錦司とベルクソン——二元論をめぐる 351

今西のもうひとつの誤解	351
超常現象研究の一環としての死後存続研究	354
幻影に救われた女性	356
心理的意識と適切な行動の無関係	360
意識およびその主体性	363
心理的意識の位置づけ	363
心理的意識を介さず自然に起こる行動	364
ウォーレスの立ち位置	369

人間の独自性 378

断続か連続か	378
個人の進歩と幸福否定	382
幸福否定の絶妙な仕組み	382
純粹体験行動の意味	385
幸福否定の進化論	387
生物の進化から見た幸福否定	387
幸福否定の裏面	390
全知全能の由来	393

参考文献 397

索引 427

図表目次

第1章

表 1-1	20 世紀半ば以前の西洋の動物文学	31
図 1-1	“賢いハンス” と飼い主のウィルヘルム・フォン・オステン	41
図 1-2	“驚異のレディー” と飼い主のクローディア・フォンダ	45
表 1-2	ライン夫妻がレディーの超常的能力の検証を目的に行なった実験の結果	48
図 1-3	明治初年の浅草で、さまざまな曲芸を演ずるヤマガラ	55
図 1-4	ワシリエフの“遠隔暗示” 実験の結果	59
図 1-5	北斎の浪裏の富士をあしらったブラウドの著書の表紙	60
表 1-3	ブラットらによるハトの帰巢実験の結果	63
図 1-6	タイコスコープの側面図	72
表 1-4	ペオックの実験（第3系列）の結果	75
表 1-5	ロウソクを使ったペオックの実験の結果	77
図 1-7	ある実験でのロボットの軌跡	77
図 1-8	プリンス（アイリッシュ・テリア）	83

第2章

図 2-1	ラディジナ＝コーツを母親として育てられたヨニ	95
図 2-2	ケロググ夫妻の長男の دونالد とグア	99
図 2-3	ヘイズ夫妻と 4 歳のヴィキィ	101
表 2-1	代表的な類人猿が学習した身ぶり言語や絵文字語の数	109
図 2-4	ガードナー夫人と 2 歳 3 ヶ月時のウォッシュョー	113
表 2-2	ウォッシュョーが初期に使った複数語文の実例	115
図 2-5	ロジャー・ファウツに、「聞く」の身ぶりをするルーシー	117
図 2-6	フランシーン・パターソンから手話を学ぶココ	121
表 2-3	ココによる新造語	125
図 2-7	ココが受けた知能検査の一部	125
表 2-4	ココによる時制と長文の理解	127
図 2-8	ベットのネコ（All Ball）と遊んでいるココ	128
図 2-9	映画の別れの場面を見て「悲しい」手ぶりをするココ	129
図 2-10	サヴェージ＝ランボーの質問に答えるカンジ	139
図 2-11	サヴェージ＝ランボーが自作した初期のレキシグラム	139
表 2-5	真の複数語発話の能力を確定する際の要件	146
図 2-12	サヴェージ＝ランボーとティーコ	148

第3章

- 図3-1 アルファベットに関する課題を与えられているアレックス 157
表3-1 ペットを飼っている患者群と飼っていない患者群の1年後の死亡数 173
図3-2 女性刑務所の服役者と訓練中の犬 177
表3-2 発作犬に関する主な研究 181
図3-3 発作の頻度の減少を示すグラフ 183
図3-4 発作対応犬が来てからの生活の質の平均自覚的改善率 192

第4章

- 図4-1 牛乳瓶のアルミホイルの蓋に穴を開けようとしているシジウカラ 205
表4-1 コガラによる蓋開け実験の結果 210
表4-2 アオガラによる2種類の蓋開け実験の結果 220
表4-3 カラ類の蓋開け実験の結果のまとめ 222
図4-2 アオガラによる蓋開け行動の拡散の推移 224
表4-4 英国で蓋開け行動に関連して、牛乳を飲んだ鳥の種類別件数 229
図4-3 シェルドレイクが童謡の実験で用いた3種類の歌詞 235
図4-4 上は、イヌと場所とのつながり 251

第5章

- 表5-1 トマセロらの最初の実験での対照試行 261
表5-2 トマセロらの最初の実験での修正版対照試行 261
図5-1 トマセロの研究グループによる実験における追跡試行の平均正答率 263
図5-2 トマセロらによる実験における誤った思い込み試行の平均正答率 269
図5-3 トマセロらによる実験での視線の分析 270
図5-4 正しい考えと誤った思い込み課題の実験の平均正答率 272
図5-5 誤った思い込み課題と正しい考え課題の実験別平均正答率 277
表5-3 ミドリハチクイを対象に、観察者の存在による影響を調べた野外実験 286

第6章

- 表6-1 意識と無意識の階層別分類 328
図6-1 30分以内に、顔につけられた印にふれた回数 336
図6-2 2頭の被験者が印に対して起こした自己指向的行動の比率 342
表6-2 マークテストにおけるコクマルガラスの自己指向的行動の出現回数 344
表6-3 鏡映像実験の対象とされた動物種の脳重量、体重、脳体重比 349
表6-4 動物の脳化指数および皮質ニューロン数 350

第7章

- 表7-1 人間の特性 381